

## 社会的背景を踏まえたスポーツコーチの文化的価値

神力亮太 菊本智之

心身マネジメント学科

## Cultural Value of Sports Coaches Based on Social Background

Ryota SHINRIKI, Tomoyuki KIKUMOTO

### 要旨

コーチングについて、チームや競技者の育成や卓越性の向上は重視されているものの、文化的価値に触れた研究は少ない。しかし、様々な文献（文部科学省, 2014；図子, 2014；岡田ほか, 2018）ではコーチの文化的価値について言及されている。そこで本研究の目的は、コーチの文化的価値について明らかにすることである。そのため、我が国の社会的な変容に伴い、コーチが果たしてきた「役割」を概観した。コーチの役割は、明治時代では「学校体育を普及・拡大するための管理者」、大正時代では「軍事強化の遂行者」、昭和時代の学校においては「教育の実施者」、企業においては「競技力の向上」、近年では「個人の自己実現をサポートすること」のように、社会変化に応じて役割が変容していた。

現代社会は、様々なものが急速に変化し、個人がスポーツに求めるものが多様化している。これからのコーチは、それらに適応しつつ、個人の自己実現をサポートすることを通じて、豊かなスポーツライフの創造に貢献することが求められる。

**キーワード**：スポーツ、コーチ（指導者）、文化的価値、社会変化

### Abstract

Regarding coaching, although the emphasis is on training teams and athletes and improving their excellence, few studies have examined cultural value. However, various documents (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, 2014; Zushi, 2014; Okada et al., 2018) mention the cultural value of coaches. Therefore, the purpose of this study is to clarify the cultural value of coaches. Therefore, I gave an overview of the “roles” that coaches have played along with social changes in Japan. The role of the coach is “administrator to spread and expand school physical education” in the Meiji era, “executor of military strengthening” in the Taisho era, “executor of education” in schools in the Showa era, and “executor of education” in companies. Roles have changed in response to social changes, such as “improvement of competitiveness” and “supporting individual self-actualization” in recent years.

In modern society, various things are changing rapidly, and what individuals want from sports is diversifying. Future coaches will be required to contribute to the creation of a rich sports life by adapting to them and supporting the self-actualization of individuals.

**Keywords** : Sport, Coach, Cultural values, Social change

## 1. 緒 言

スポーツ現場において、コーチが重要な役割を果たしていることは言うまでもない。コーチ (coach) の語源は、15世紀のハンガリー語“kocsi”あるいは“kotsi”に由来し、「Kock という村で作られていた四輪馬車」の短縮形として用いられたものである (Onions, 1966)。これを踏まえ、内山 (2013) は、「コーチが何らかの目的を持った人をその目的地 (目標) にまで確実に送り届ける役割を担っていた」とし、「見方を変えれば、客は自ら1人で目的地 (目標) に到達できないばかりか、それがどこにあり、どのようなものであるかは知らない、ということでもある。逆に『コーチ (馬車) は目的地 (目標) にまで大切なお客様を無事に送り届ける』ということは、目的地 (目標) を勝手に決定・変更できない反面、コーチは目的地 (目標) がどこにあり、それが何であるかを、また、どのような訓練 (トレーニング) を行ったらよいかをすでに知っている、そういった『先導者』として理解される」と述べている。この他に、伊藤 (2017) は「競技者やチームを育成し、目標達成のために最大限のサポートをする活動全体がコーチングである」とし、Lyle (2002) は、コーチングが主眼に置くのは「個人もしくはチームの競技力 (ability) を向上させること」という定義している。これらを踏まえ、佐良土 (2018) は、コーチングは「能力 (ability)」ではなく、「卓越性 (excellence) を向上させる」とした方がコーチングの定義として自然であり、適合すると述べている。このようにコーチングの定義については、多くの研究者が様々な定義づけをしており、一定の見解が得られていない。関子 (2014) は、プロフェッショナルコーチは、スポーツ医学的な能力を駆使し事故防止に心がけることもあれば、リスクをマネジメントするために法律家のように行動することや、選手・チームのための活動費を集めて経営者のように施設や用具を管理することもあると述べ、良好なコーチング実践を行うためには一つの専門家ではなく、各種の能力をバランスよく身につけ、目的に応じて利用できる専門職業人でなければならないとしている。その上で、コーチングの目的と行動を主に、競技力の向上を目的とした行動と、人間としてのライフスキル、すなわち人間力の向上を目的とした育成行動に分類している。

また、文部科学省 (2014) は、「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議 (タスクフォース) 報告書」において、「スポーツ指導は、競技者がその自発性の下に、各々の関心、適性等に応じて、安全かつ公正な環境において日常的にスポーツを親しむことをサポートする活動であり、このようなサポート活動全体を『コーチング』とし、全ての競技者やチームに対してコーチングを行う人材を『コーチ』とします」としている。すなわち、コーチングとは競技力の向上に直接的に影響する行動のみならず、間接的な影響も含んだサポート活動全

体を指すものである。

日本スポーツ協会 (2020) による望ましい公認スポーツ指導者は、「日常の『生活/暮らし』にスポーツを取り入れることによって『豊かな人生』を得られることを広く一般に定着させるとともに、『仲間と楽しく行いたい』『うまくなりたいたい、強くなりたいたい』さらに『健康になりたい、長生きしたい』という欲求に応えられるよう、その実現に向けて『サポートする』活動を通して、望ましい社会の実現に貢献する役割を持つ」である。すなわち、そのコーチが所属するチームやプレーヤーに対してはもちろんのこと、その影響プロセスを介して社会全体に様々な影響を波及させることを期待している。具体的には、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を通じて国民の気運上昇及び大会後の有形・無形のレガシーを生むことを目的に、オリンピック・パラリンピック教育が実施されているが、その実施を、運動部活動の外部指導者が行っている (岡田ほか, 2018) ことからコーチへの期待の大きさがうかがえる。

しかし、その一方で、近年、コーチの暴力やセクシャルハラスメント (熊安, 2014; International Olympic Committee, 2007) が社会的な問題となっており、多くのメディアに取り上げられている。池川 (2019) は、スポーツコーチングに関するインテグリティについて社会学視点から考察し、スポーツコーチング環境下における不正・暴力・不祥事が多発する中で、スポーツの価値そのものに社会的並びに社会学存在に警笛がもたらされていると述べている。このように、現場のコーチがチームやプレーヤーに対して、好ましい関わり方をすると国民のスポーツへの機運が高まり有形・無形のレガシーを残すことに貢献できる反面、そうでない関わり方になるとスポーツのインテグリティ低下のようなスポーツ価値そのものを損なうことにつながると言える。さらに、コーチの語源を前述したものの、「語源に縛られてしまい、時代に即した新しい解釈を阻害してしまう可能性も無きにしも非ず」(日本スポーツ協会, 2020, p.3) と言われており、コーチングは社会的な活動であると認識できるため、その時代に応じたコーチの文化的価値を検討する必要がある。

以上のように、コーチングは、社会に対して影響を与えるものであると同時に、社会的な背景を踏まえた在り方を考察すべきである。しかし、前述のコーチングの定義によると、社会的に対してどのような影響を及ぼしているかについて十分に検討されているとは言い難い。そこで本研究では、これまでに社会的背景に応じてスポーツコーチの役割がどのように変容しているかを概観した上で、現代社会においてコーチの役割を検討することを目的とする。そのため、本研究では、これまでのスポーツコーチングが社会においてどのように活用されてきたのかを概観し、これからの時代において期待されるコーチングの在り方について考察する。文部科学省 (2014)

のタスクフォースにおいて、新しい時代のコーチングとは、それが「競技者やスポーツそのものの未来に責任を負う社会的な活動」であるとし、「これらの認識が社会全体で共有される必要がある」とされている。本研究において文化的背景を踏まえた現代のコーチに求められる役割が明らかになることで、今後スポーツに関わる全ての実施者の豊かなスポーツライフの創造に貢献できると考えられる。

## 2. 文化としてのスポーツとその価値

佐伯（1984）は、スポーツ文化について以下のように述べている。

文化とは、「人類がみずから手で形成・継承（伝承）してきた物心両面にわたる（有形・無形の）成果の総体」であり、文化はわれわれ人間集団が欲求充足のために創意工夫していくものである。それと同時に、個々の人間も環境という形で絶えず文化に適応し学習させられていると言ってもよい。そうした意味では、スポーツも、人類が人生をより豊かに充実して生きていくために、その時代その時代に持てる先人たちの英知や思いを結集して創造されてきた「歴史的・社会的な遺産の総体」であり、まさに、スポーツは人間欲求を充足する生活様式として人間自身が創り出した、人類共通の文化である。

このことから、スポーツ活動で実施されるコーチングも、文化的な活動であり、その時代その時代に先人たちの英知や思いを結集して想像されてきたものであり、人類共通の文化であると言える。金崎（2008）は、スポーツ文化を、①スポーツの物的事物、②スポーツの行動様式、③スポーツの規範、④スポーツの思想・観念という4つの要素が互いに関連しあって1つの体系あるいはシ

ステムを成すものとし、「スポーツ文化とは、スポーツに関わる精神的、技術的、物質の様式とその所産であり、それはスポーツについての思想・観念、規範、スポーツの行動様式および物的事物からなる総合体である」と定義している（表1）。スポーツコーチングは、これら全てに関係している。物的事物に関しては、施設や用具を適切に使用し、安全で安心なスポーツ活動を展開することが求められている。行動様式に関しては、主に方法論としてのスキルコーチングが該当する。規範に関しては、スポーツコーチはスポーツ基本法や、安全管理について法律などにのっとった行動が求められることが該当する。最後に思想・観念については、社会の構成要因であるプレーヤーに対して、コーチングを行うことでスポーツ観を形成することが関係している。青木（2003）は、高校運動部員のスポーツ観の形成について検討している。スポーツ観は、当会社のパーソナリティ、能力、適性等の個人特性の下に、日常の直接または関節のスポーツ経験や学習、所属・準拠集団の影響によって形成される（佐藤・柳井、1975；安田ほか、1983；斎藤、1990；東ほか、1992；森岡ほか、1993；狩野・山内、1993；堀ほか、1997）ため、スポーツ観形成とはスポーツ参加を通して態度や価値を学ぶことであり、スポーツによる社会化と述べている。さらに青木（2003）は、部活動適応感が高いということは、部活内存在感が高く、指導者・部員との人間関係が良好で個人が尊重されており、部活への充足度・満足度も高い状態であり、部活動適応感が直接的にスポーツ観を形成に影響すると述べている。これに加え、我が国の運動部活動は、家父長的・封建的人間関係があるため（山本、2008）、コーチのコーチングがプレーヤーに大きな影響を与えていることは自明である。すなわち、コーチがプレーヤーのスポーツ観を形成する重要な立場であると言える。このように文化的な活動としてのスポーツコーチングを実施するためには、多視点からコーチングをとらえる必要があると言える。

表1：スポーツ文化の要素（金崎，2008）

要素	内容
①物的事物	スポーツが展開される施設・場所・コート、設備、そこで使用されるネットやボール、ラケットなどの用具類、スポーツをしている人が身につけるスポーツのシューズやウェア、さらにスポーツ専門の雑誌や新聞などのメディアといったスポーツにかかわる物質的な要素。
②行動様式	行動様式に関して、中核の議論となるのはスポーツ技術である。スポーツ技術はある特定の目標を達成するための合理的な運動の仕方をいう。
③規範	規範とは、人が行動したりある態度を撮ったりする場合の望ましい基準となるものであり、法的規範と道徳的違反の2つがある。法的規範には、法律や条例、規則などがあり、道徳的規範には道徳や倫理、マナーやエチケットなどがある。
④思想・観念	スポーツについての考え方なり観念をいう。

表2 スポーツ文化からもたらされる価値の一覧（先行研究を筆者が修正）

価値の分類	価値の内容
①個人的価値	スポーツは、身体を動かすという人間の本源的な欲求に応え、爽快感や達成感、ストレス解消など精神的充足感のほか、健康・体力の保持増進や生活習慣病の予防、青少年の健全育成など、心身の健全な発達をもたらす
②教育的価値	スポーツは、礼儀正しく、マナーや規則を守り、協調生や社会力・生きる力のある、よりよい人間を育てることに大いに役立つ
③社会・生活向上的価値	スポーツを通じた家族や地域との人間的な交流は、地域への誇りと愛着、連帯感等を醸成し、人間関係の希薄化等の問題を抱える地域コミュニティの再生・活性化につながる
④経済的価値	スポーツ振興による関連産業の広がりや、新たな需要と雇用を創出するとともに、スポーツによる市民の心身の健康保持・増進、医療費削減等の効果をもたらす
⑤国際的価値	スポーツによる国際交流は、言葉の壁や生活習慣の違いを超え、同一のルールの下で互いに競い合うことにより、世界の人々との相互交流を促進し、国際的な友好と親善に寄与する
⑥鑑賞的価値	極限に挑戦するアスリートのひたむきな姿や、競技レベルの高いプロスポーツの試合などは、“みる”人に夢や感動、希望や勇気を与えるとともに、スポーツ文化への関心や意欲を高める

では、スポーツ文化によってもたらされる価値にはどのようなものがあるだろうか。中西（2012）によると、スポーツ文化からもたらされる価値は、①個人的価値、②教育的価値、③社会・生活向上価値、④経済的価値、⑤国際的価値、⑥鑑賞的価値がある（表2）。このように、スポーツによってもたらされる価値は非常に多岐にわたっているが、我が国においては、教育的価値を最重視しているように見受けられるが、その基盤となっているのが、明治時代における学校体育であると考えられる。そこで、明治時代以降の社会的背景におけるスポーツ文化と、その価値について概観し、その時代においてコーチが担ってきた役割について考察する。

### 3. 社会変化とコーチの役割

#### 3.1. 明治時代のスポーツ文化と指導者

明治維新後において、近代国家建設の基礎として国民一般の教育が重要視された。そこで文部省が設立され、全国規模における公的な教育制度の立案を行い、明治5（1872）年に我が国初の全国規模の近代教育法令である「学制」が公布された。その後、明治12（1879）年に「教育令」によって改正され教育制度の定着を試み、さらに明治19（1886）年初代文部大臣森有礼による「学校令」制定によって、初等・中等・高等の学校種別が規定された。明治18年初代文部大臣に就任した森有礼は、教育の目的は帝国に必要な善良の臣民を育成すること

だといひ、体育も単なる体育ではなく、日本人を国民にまで教育する重要な手段であると主張した（中村, 1976）。さらに、森有礼は順良・信愛・威重の三気質が重要とし、それを達成するために師範学校令第一条に謳われたように、兵式体操をもって学校教育の背骨にしようとい図っていた（永谷, 2017）。

また、明治期に設置された中学校の校友会の規則を見ると、知徳体の三育や文武諸芸の発達、会員相互の親睦といった目的で設置されている。しかしながら、校友会の設立はこうした表向きの目的ばかりではなく、同窓生や地域の青年集団など外からの影響があり、その他にも学内における出身地域ごとの集団、寄宿生と通学生など、様々な集団間の対立があつて、これらを排除するために学校主体の校友会組織を新たに作る、あるいは刷新して学校側の力を強くし、生徒を全員参加させ、生徒の活動を学校の管理下に置くことが大きな目的であつた（安東, 2009）。

神（1984）によると、明治期の体育教師像は、政府の制御の手綱にかえて保守的役割を演ずるようになっていたことや、教員が民衆の前で開花の伝達の役割を効果的に演じていくための保守的役割に加えて、権力を背後に役人や軍人と同性質の威信を保持するほどだった。

以上から、明治時代におけるスポーツは、規範としてのスポーツ文化として導入され、文部省が意図する教育的な価値を重視していた。我が国でスポーツコーチングを実施していたと考えられる体育教師においては、文化

的な価値を拡大する担う者としてよりむしろ、政府の意向を体现するために、保守的な役割を演じつつも、プレーヤーである生徒に対して権威的・管理的な振る舞いをしていた。すなわち、明治時代における体育教師（指導者）は、先述の「先導者」（内山, 2013）という役割ではなく、文部省が意図するような「学校体育を普及・拡大するための管理者」であった。

### 3.2. 大正時代のスポーツ文化と指導者

大正時代のスポーツ文化について永谷（2017）は、以下のように要約している。

大正デモクラシーの風潮などもありスポーツが大衆化し、全国選抜中等学校野球大会の開催や学校間の対抗戦が開催されるなど学校運動部活動が盛んに行われるようになった。しかし、こうした大衆化自由化の流れに逆行するように、第1次世界大戦の影響もあり、学校教育活動にも軍事的基盤が整備されていく。大正14（1925）年には治安維持法が制定され、次第に自由主義的な潮流が弾圧されるようになった。教育現場においても、明治初期森有礼初代文部大臣が推奨した、かつての兵式体操が再導入されるようになり、学校運動部活動も鍛錬効果がある活動として捉えられるようになった。さらに、昭和13（1938）年には、国家総動員法が発令され、学校内における軍事教練が強化される。特に運動部の多くは、大会の中止などもあり競技的要素は薄められ鍛錬部と変化し、武道・戦闘能力の増加に役に立つような国防的競技に重点が置かれることとなった。このことは、部活動の「愛国心・忠君愛国の精神・国威高揚・国家への帰属意識・心身の鍛錬と軍事教練・皇国民の基礎的修練」等の教育的効果の側面を切り取って、戦時戦力としての学校報国団を組織している。

すなわち、大正期において、一旦は大衆化の流れにあったスポーツ文化は、戦争の契機に軍事的な側面での成果を期待されるようになっていた。大正時代の体操科教員は、その約半数を軍隊出身者が占めるまでになっており、やがて陸軍現役将校が学校に配属されるに及んで、学校体育と陸軍との関係は一層深まっており、戦前のわが国の中等学校以上の教育においては、体操科は軍事予備教育としての役割を期待され、これに応えることによって必修教科であり得た（大熊, 2001）。

以上から、大正時代においてスポーツとして実施するのは学校の体育であった。また、学校体育は軍事教練を実施する場であり、体育教員も軍隊出身者が行うようになるなど、この時代におけるコーチ（体育教員）の役割は、「軍事強化の遂行者」であったといえる。

### 3.3. 昭和時代のスポーツ文化と指導者

戦後は、GHQの指導により運動部活動では対外試合が禁止されたり、武道が禁止されたりするなど、GHQの指導により軍事を連想させる活動を運動部活動で実施することが禁止されていた。すなわち、日本とアメリカで体育・スポーツへの理解や解釈の相違は大きく、日本では教育を非軍事化しているにもかかわらず、これまで文部省の学校における体育・スポーツ活動は、アメリカにとっては軍事化を継続するものであると捉えられていた（永谷, 2017）。そこで日本の学校教育におけるスポーツ実践については、あくまで教育的であり、スポーツマンシップの醸成や民主主義的態度の形成になるものでなければならず、結果的には具体的な指導の方法論のない「ただスポーツをすればよい」という「スポーツおさぶり論」が生じることになった（草深, 1986；内海, 1996）。すなわち、当時の文科省は、「スポーツの教育的価値」を前面に出すことによって、GHQの意向に沿ったものであることを強調していたのである。したがって、学校教育における体育・スポーツにおけるコーチ（体育教師）は、GHQの意図に沿って、スポーツの教育的価値を高めるための「教育の実施者」であった。

また、戦前から戦後の高度経済成長期にかけて、企業の大規模化による従業員数の増加や労働組合の組織化と労働運動の激化、産業構造の第2次、第3次産業へのシフト、労働力不足の深刻化、労務関係諸立法による産業民主主義性の発展などにより、労務管理の重要性がますます高まり、大企業を中心に、近代的な人事労務管理制度の導入が進んでいった（澤井, 2011；白井, 1992）。こうした企業において、企業に所属する従業員自身がスポーツを楽しむことを目的として、企業スポーツが誕生した（荻野, 2007）。娯楽や余暇活動が乏しい時期にあって、日頃同じ職場で働く仲間の活躍に声援を送り、自社のチームの勝利に歓喜することが娯楽であると同時に、従業員の士気や職場の一体感を高めるなど、労務施策としての効果が期待され始めた。さらに、企業アスリートがオリンピックに出場するなどメディアへの露出が増え、社内外への認知度や知名度を高めることによって、「企業のイメージアップ」を図るなど企業の広告宣伝効果も期待されるようになった。これらは、工場を有する企業において顕著であり、地域住民へのイメージアップや求心力となる存在としても重要な役割を果たしていた。小野・友添（2014）は、「指導者の受け入れは、競技部の練習内容に変革をもたらし、それは部員の競技力の向上へとつながっていった」とあるように、企業スポーツにおける指導者は、「競技力の向上」をさせることが求められていたことがわかる。すなわち、企業のスポーツにおいては、労務施策を背景とした従業員に向けた「個人的な価値」を高めることと、企業アスリートの活躍によるメディアを通じた広告宣伝効果などの「社会・生活向上的価値」を期待するようになっていた。

このように、スポーツは一義的なものから多様な価値を内在するものへと変化し始めている。実際に、昭和60年代になると我が国におけるスポーツ文化は大きな変容を迎えている。1961年に我が国初のスポーツに関する法律である「スポーツ振興法」が制定された。「スポーツは、世界共通の文化である」という考えのもと、スポーツ・フォー・オールという言葉とともに「みんなのスポーツ論」が普及した。前述の高度経済成長期において、労働の質と量に変化が現れ、国民の所得が安定し、余暇が増大すると、次第にスポーツは「観る」、「一部の人ができる」ものから「自身がする」ものへとなり始めた（松浪、2008）。みんなのスポーツ論は、1988年に文部省体育科の改組により生涯スポーツ論へと変容し普及されるようになった。生涯スポーツは、「生涯にわたるライフステージにおいて、生活の質（QOL）が向上するように自分自身のライフスタイルに適した運動・スポーツを継続的に楽しむこと」（山口、1989；野川、2006）と定義されている。すなわち、スポーツに関わる全ての国民がそれぞれのライフスタイルに応じて適した運動を行うことによって、スポーツの価値から得られる恩恵を享受できるようにすることを指導者は求められるようになった。

以上から昭和時代において指導者は、学校教育においては「教育」、企業スポーツにおいては「競技力の向上」「社会・生活向上的価値」が求められるようになり、スポーツの価値を一義的に捉えるのではなく、「多様な価値を伝えていくこと」が求められるようになった。

### 3.4. 現代社会におけるスポーツコーチの文化的価値

我が国において平成23年度の「スポーツ立国戦略論」を契機とし、「自律的な拠点クラブを中核とする新たなスポーツコミュニティの形成」が掲げられ、「従前の教育委員会中心のスポーツ振興を超えた『新しい公共』の形成」を目指して、「スポーツコミュニティの形成促進」事業として提示された（森川、2011）。そこで、生涯スポーツを実践する環境として文部科学省は総合型地域スポーツクラブやスポーツ少年団に力を入れている。総合型地域スポーツクラブは、人々が、身近な地域でスポーツに親しむことのできる新しいタイプのスポーツクラブで、子供から高齢者まで（多世代）、様々なスポーツを愛好する人々が（多種目）、初心者からトップレベルまで、それぞれの志向・レベルに合わせて参加できる（多志向）、という特徴を持ち、地域住民により自主的・主体的に運営されるスポーツクラブである。我が国における総合型地域スポーツクラブは、平成7年度から育成が開始され、平成29年7月には、創設準備中を含め3,580クラブが育成され、それぞれの地域において、スポーツの振興やスポーツを通じた地域づくりなどに向けた多様な活動を展開し、地域スポーツの担い手としての役割や地域コミュニティの核としての役割を果たしている（スポーツ庁、2020）。総合型地域スポーツクラブにおける

指導者のコンピテンシーに着目した高松・山口（2015）の研究では、「マナー教育」「協働的アプローチ」「マネジメント」「指導力」「クラブ外交流」「クラブ内交流」「安全管理」が指導者のコンピテンシーとして抽出されており、トップレベルのチームの指揮をとる指導者のコンピテンシーとは異なっていることが示されている。

また、スポーツ少年団は、日本体育協会（現 日本スポーツ協会）創立50周年記念事業として「1人でも多くの青少年にスポーツの喜びを提供する」「スポーツを通じて青少年のこころとからだを育てる」と願い、1962年に設立され、「みんなのスポーツ」を推進していくための中核を担ってきた。スポーツ少年団は、ヨーロッパ型の子どもから高齢者までが参加し、自分たち自らが運営・活動を行う自主・自治の組織である「クラブ（Club）」を参考にした活動であり、我が国の生涯スポーツ振興施策の柱の1つでもある総合型地域スポーツクラブの理念に通じるものがあるため、現代でも日本全国の地域社会のスポーツの基盤として積極的に実施されている。スポーツ少年団における指導者は、団の目的と理念の実現に向け、単なる実技指導にと止まることなくより幅の広い多様な面での指導力が求められる。少年・少女たちの人格形成に大きな影響を及ぼすスポーツを通しての活動であることより、青少年指導者としての人格・見識はもとより、豊富な知識・能力が必要である（日本スポーツ協会、2020）。

また近年では、総合型地域スポーツクラブやスポーツ少年団のみならず、民間のフィットネスクラブでのスポーツ実施者が増加している。フィットネスクラブには、あらゆるターゲットに対してサービスを提供する総合型フィットネスクラブと特定のターゲットに対してサービスを提供する新興型フィットネスクラブがある。総合型と新興型の市場規模および施設数について、前者は減少している一方で、後者は増加傾向にある（株式会社 マグマスパジャパン、2016）。すなわち、民間のフィットネスクラブの会員がスポーツに求める価値が多様化しており、自らの求める自己実現をより達成しやすいサービスを利用していると言える。

以上から、現代のスポーツは、生涯スポーツとして個人の自己実現ができることという「個人的価値」を重視していることがわかる。このことから、現代のスポーツコーチにおいては、多様な価値観に対応し、「個人の自己実現をサポートすること」が重要であると言える。

## 4. 総 括

本研究では、コーチの文化的価値を検討することを目的とした。そのために、まずコーチングの語源や定義についてみると、コーチがプレーヤーへの直接的な影響をすることに焦点を当てているものが多く、文化的な意義について言及しているものは、見受けられなかった。そこ

で、文化的な意義について検討するために、これまでの社会的な背景に応じたコーチ（指導者）の役割は、明治時代では「学校体育を普及・拡大するための管理者」、大正時代では「軍事強化の遂行者」、昭和時代の学校においては「教育の実施者」、企業においては「競技力の向上」、近年では「個人の自己実現をサポートすること」のように、時代に応じて役割が変容していた。現代社会においては、社会・経済・政治・技術が急速に変化し、スポーツ現場を取り巻く環境もそれに伴って変化している。5GやIoTのようなテクノロジーの発展は、トップレベルのエリートプレイヤーの競技力向上だけでなく、生涯スポーツの実施者においてもウェアラブル端末を利用することによってスポーツ活動を通じた健康管理を容易に行うことが可能になっている。また、新型コロナウイルスの影響により、スポーツを取り巻く社会はさらに変化することは間違い無い。このような社会変化に適応しつつ、それぞれの環境において、プレイヤーの自己実現をサポートするようなコーチングを通じて、望ましい社会の実現をすることができるコーチ（指導者）が求められる。日本の教育観が、とくに体育科教育における教育観が、戦前からの軍事主義的イデオロギーを継承したこと、そして部活動における家父長的・封建的人間関係や競争における敵の内在化、そして閉鎖的社会集団の形成といった性格が、スポーツと結びついた（山本, 2008）。すなわち、スポーツがもたらす文化的な価値の中でも教育的価値が前面に出されてきた。これは、これまでのコーチングの定義においても、個人的価値や教育的価値から定義づけられていることからそう言える。しかし、多様なスポーツの文化的な価値を「先導者」として、スポーツ文化を継承するためには、他の価値についても涵養していく必要があると考えられる。そのために、これからのスポーツコーチにおいては、個人的価値や教育的価値を高めることはもちろん、それらを通じて社会的な価値を高めることも求められている。

#### 参考文献

青木邦男「高校運動部員のスポーツ観とそれに関連する要因」『体育学研究』、48巻、2003年、207-223頁  
 安東由則「明治期における中学校校友会の創設と発展の概観」『武庫川女子大学教育研究所レポート』、第39巻、2009年、31-57頁  
 池川哲史「スポーツコーチングにおけるインテグリティに関する社会学的考察」『総合研究所所報』、第20号、2019年、36-46頁  
 伊藤雅充「コーチとコーチング」『コーチング学への招待』、大修館書店、12-32頁  
 International Olympic Committee, “*HARASSMENT AND ABUSE IN SPORT*”, 2007.  
 内山治樹（2013）「コーチの本質」『体育学研究』、第58巻、第2号、2013年、677-697頁

内海和雄「スポーツ部活行政の現状と課題」『一橋論叢』、第116巻、第2号、1996年、287-309頁  
 大熊廣明「わが国学校体育の成立と再編における兵式体操・教練採用の意味：明治・大正期を中心として」『筑波大学体育科学紀要』、第24巻、2001年、57-70頁  
 岡田悠佑・友添秀則・深見英一郎・吉永武史・根本想「日本におけるオリンピック・パラリンピック教育の促進方法に関する研究」『体育学研究』、第63巻、第2号、2018年、871-883頁  
 萩野勝彦「企業スポーツと人事労務管理」『日本労働研究雑誌』、564巻、2007年、69-79頁  
 Onions, C T. (Ed.) “The oxford dictionary of English etymology.” Clarendon Press: Oxford, p.184  
 小野雄大・友添秀則「大正から昭和戦前期における青年団の体育・スポーツ活動：機関誌『フチュウスポーツ』からの検討」『体育学研究』、59巻、2014年、705-720頁  
 狩野素朗・山内隆久「現代心理学」『ナカニシヤ出版：東京』1993年、126-133頁  
 金崎良三「スポーツ文化考」『変わりゆく日本のスポーツ』、世界思想社、2008年、94-109頁  
 株式会社 マグマスパジャパン「新たな女性顧客を想像するマグマスパスタジオの導入提案」  
<http://www.magmaspa.jp/about/siryoku/01.pdf>  
 草深直臣「体育・スポーツの戦後改革」『スポーツの自由と現代』、下巻、1986年  
 熊安貴美江「スポーツにおける暴力/セクシュアル・ハラメント：見えにくいハラメントの現状と課題」『女性学講演会』、第17巻、2014年、127-153頁  
 斎藤勇『対人社会心理学重要研究集 環境文化と社会化の心理』、誠信書房：東京、1990年、103-188頁  
 佐伯聰夫「スポーツ文化」、菅原禮編、『スポーツ社会学の基礎理論』、不味堂出版、1984年、71頁  
 佐藤智雄・柳井道夫『社会心理学』、学文社：東京、1975年、193-198頁  
 佐良士茂樹「『コーチング哲学』の基礎づけ」『体育学研究』、第63巻、2018年、547-562頁  
 澤井和彦「日本企業スポーツの制度と制度移行の課題に関する研究」『スポーツ産業学研究』、第21巻、第2号、2011年、263-273頁  
 白井泰四郎『現代日本の労務管理』、第2版、東洋経済新報社、1992年、47頁、53-59頁  
 神文男「体育教師像について：明治期の教科体育を中心として」『長崎愛学教養学部（人文科学篇）』、第25巻、1984年、111-130頁  
 図子浩二「コーチングモデルと体育系大学で行うべき一般コーチング学の内容」『コーチング研究』、第27巻、第2号、2014年、149-161頁  
 総合型地域スポーツクラブ「スポーツ庁」  
[https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/sports/mcatetop05/list/1371972.htm](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop05/list/1371972.htm)

- 高松祥平・山口泰雄「総合型地域スポーツクラブにおけるスポーツ指導者のコンピテンシー尺度作成の試み」『生涯スポーツ学研究』、第12巻、第1号、2015年、13-23頁
- 東洋・繁多進・田島信元『発達心理学ハンドブック』、福村出版株式会社：東京、1992年、488頁
- 中西純司『『文化としてのスポーツ』の価値』『人間福祉学研究』、第5巻、2012年、7-24頁
- 永谷稔「学校運動部活動を教育に位置付けた文部省の意図：明治初期からの戦前と戦後の史的背景から」『北海学園大学大学院経営学研究科 研究論集』、第15巻、2017年、9-15頁
- 永谷稔「明治期における運動部活動の創成：高等師範学校と嘉納治五郎を中心に」『北海学園大学大学院経営学研究科 研究論集』、第14巻、2016年、49-56頁
- 中村民雄「明治期に於ける武道の正課編入過程に関する研究」『武道学研究』、第8巻、第3号、1976年、53-59頁
- 日本スポーツ協会『リファレンスブック』、2020年
- 野川春夫「生涯スポーツとは」『生涯スポーツ実践論 改訂2版』、市村出版：東京、2006年
- 堀洋道・山本真理子・吉田富二「社会心理学」福村出版：東京、1997年、84-86頁
- 松浪登久馬「日本における体育の変遷とコミュニケーション」『近畿大学健康スポーツ教育センター研究紀要』、第7巻、2008年、3-7頁
- 森川貞夫「スポーツにおける『新しい公共』」『スポーツ社会学研究』、第19巻、第2号、2011年、19-32頁
- 森岡清美・塩原勉・本間康平『新社会学辞典』、有斐閣：東京、1993年、196-197頁
- 文部科学省「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議（タスクフォース）報告書」、2014年
- 安田三郎・梅原勉・富永健一・吉田民人編著「社会的行為」『基礎社会学』、第1巻、東洋経済新報社：東京、1983年、47-68頁
- 山口泰雄「生涯スポーツの理論とプログラム」『鹿屋体育大学』、1989年
- 山本順之「暴力をとおしてみる学校運動部活論」『変わりゆく日本のスポーツ』、世界思想社、2008年、228-244頁
- Lyle, J. "Sport coaching concepts: A framework for coaching practice" Routledge. 2002